

# 30歳エンジニアが シンガポールへ行つた理由

わけ

菅沼 大樹

(高51回)



●すがぬま・だいき  
座光寺出身。国立電気通信大学  
卒業後、システムエンジニアに。  
2016年に起業し独立。現  
在、病院向けに採用成功報酬型  
ホームページ制作を展開する株  
式会社ウェブリク(埼玉県川口  
市)代表取締役。空手四段。

「パパ、パードゥン?」

シンガポールのチャンギ空港で入国審査の女性が何を言つているのか全く聞き取れず、緊張しながら日本の学校教育で教えられた聞き返す言葉を言つてみた。

女性はニヤッと笑みを浮かべ「どうぞ」というジャスチャーをしたので「え?いいの?」と思いながら軽く会釈をしてシンガポールに入国した。

2011年2月末、当時私は30歳だった。

## 30歳このままでのいいのだろうか?

30歳になつた私は名古屋のベンチャー企業で働いていた。大学卒業後は大手IT企業に4年間勤務し、仕事にも慣れたので「もっと幅広いITスキルを身に付けたい」とベンチャー企業に転職した。

ベンチャー企業では中小企業を中心に課題解決の提案

や元請けから下請けまで様々な案件を経験し、時には客先のプロジェクトリーダーとしてマネジメント業務を行つてきた。部下を育てながら中間管理職サラリーマンを無難にこなしていたと思う。

ただ、30歳になり将来について漠然とした不安を抱えるようになつていた。「この今までいいのだろうか?」と、これからは英語を話せないとダメだ

IT関連の仕事をしていると心躍る最新技術は常に米国からだつた。Googleマップのグリグリ動く地図に驚かされ、Google検索とChromeでウェブ閲覧が快適になり、スマホがガラケーを駆逐していった。そうした最新情報は英語というのが当たり前で、日本語の書籍が出版される頃にはその情報は一段古く、必然的に仕事では英語のドキュメントを読む機会が増えてい

た。

しかし英語のドキュメントを読みつつも、分からぬことをコミュニケーションで質問することが出来ない。IT業界でなくとも日本人は誰もが思うのではなかろうか。

「これからは英語が話せないとダメだ」

## なぜシンガポールなのか

名古屋在住当時、飯田高校空手班の先輩のお父さんが近くに住んでいた。その方はシンガポールを経由して様々な国へ行くことが多いのだけれど、IT関係が苦手ということで、メールのやり取りなどをお手伝いするところがまたあつた。そして、会った際はシンガポールの現状、海外での体験談、飯田の昔話をよくしてくれた。

「変わらないのは日本だけ」

「シンガポールの地下鉄は無人運転だよ」

「米ドルとだけ比べてもダメ。他国の通貨とも比較しないと」

今まで政治や経済は無関心だったけれど、そんな話を聞くたびに少しずつ興味が湧いていった。同じアジアで激的な成長を遂げているシンガポール。東京23区ぐらいの大きさしかないのになぜ成長できるのか？

何も知らない国よりかは少しでも知っているシンガ

ポールで英語を学び、その後はIT先進国の米国へ行ってみるのも面白いかもしない……。

いつしかそんな風に思うようになり、日本での先の見えた仕事をこなすより、シンガポールで英語という武器を手に入れてもっと面白い景色を見たいと行動を起こすこととした。

## 現地のエージェントを使って転職活動

検索してみるとシンガポールの転職エージェントとして活動している日本人は結構いる。まずは大手転職サイトを使わずに個人のエージェントに問い合わせてみた。

たまたま、ウェブプログラマーを募集している広告代理店があり、その社長も日本人で「英語はそのうち出来るようになるだろう」ということでスカイプ面接のあと採用が決まった。転職活動を始めてから2週間も経っていない。スカイプ面接も日本語であっけなく終了し、自分の中では清水の舞台から飛び降りる気持ちで決断したシンガポール行きはあっさりと実現した。

## 英会話教室で「俺しゃべれるじゃん！」

シンガポール行きが決まってから英会話に通つた。

簡単な日常会話ぐらいは出来るようになつておきたい

と、ビジネス向け短期集中型の高額な部類に入るコースを選択した。誰もが一度は聞いたことのある有名な英会話教室だった。

私のほかは中年男性2人のグループレッスン。授業は少しテンポが早いなと思ったが、教科書を参考に何となく話せることが出来ていた。自己紹介や食事の場面などを想定して会話をする。授業の間は英語しか使ってはいけない。でも外国人先生の言うことは何となく聞き取れることが出来ていた。練習相手も日本人なので聞き取りやすい。当時の私は思つた。

「俺英語しゃべれるじゃん！」

### 現地では全く通じず挫折感

そして2011年2月末シンガポールへ入国。常夏の太陽の強い日差しを感じながら、期待感と不安でドキドキしていた。

まず愕然としたのは相手の言つていることがほぼ聞き取れない。自分の英語も伝わらない。ホーカー（屋台街）で注文するのに「これ」と指示した後に、店員が何か言つているのだけれど、分からないのでとりあえず首を縦に振る。

### 英語のほかに何が出来ますか？

シンガポールで英語を話せるのは当たり前。今すぐ話せなくとも少しづれば話せるようになるという感覚。だから英語が話せないことで何か言われたことはない。だけど「で、お前は何が出来るんだ？」というプレッシャーはあった。

職場では日本人の社長の会社だけあって日本好きな方

が多かった。何か笑顔で話しかけてくれて、いるけど聞き取れない。こちらが困つていると相手は「大丈夫だよ」という感じで行つてしまつ。

自分の英語力のなさに絶望した。

「今まで勉強してきたのは何だったのか」と一旦今までの本を全部捨てた。ゼロから勉強しようと発音の仕方（舌の使い方）から勉強し、タクシーに乗ったときはとにかく運転手に話しかけるようにした。

発音の勉強と練習はとても良かつたと思う。自分の発音に自信を持つて話せるようになり相手に「s o r r y？」と聞き返されても焦ることはなくなつた。ちなみに冒頭の「パードゥン？」は聞いたことがない。「s o r r y？」が一般的。思い返してみると入国審査の女性がニヤッと笑つた意味も分かる。パードゥンというのは日本人だけではなかろうか。

会社でウェブプログラマーは私一人だけだったので、居場所はないのだと感じた。

デザイナーは私に説明するために簡単な英語と図でコミュニケーションをとってくれた。営業も最新IT技術に関する相談してくれたりと、英語が話せず劣等感を感じていた私にとって、周りから頼られるのは救いだつた。

さらに飯田高校から続けている空手も大いに私を助けてくれた。シンガポール人の方がやっている空手道場へ行くようになり、しばらくすると空手を教える側になつて英語で説明していた。困ったときはやつて見せればいい。共通の趣味で話しが弾み、いろんな国の人と話せるいい機会になつた。

仕事では空手マンで覚えられ、突きや蹴りを見せると手を叩いて喜んでくれた。一芸は身を助ける。

逆に言うと英語が話せるだけでは普通の人。イン

ターンで日本の学生が来ていたが、雑用しか任せてもらえず遊んで帰るだけだつた。何か持つてい



シンガポールの空手道場で教え子たちと

ないと外国人である私には私が誰かの背中を押す役割を出来ればと思う。

## 価値観が変わる出会いと経験を

結局シンガポール滞在期間は2年間。諸事情で日本へ帰国することになり、その後、糾余曲折を経て埼玉県へ移り住み36歳での会社を起業した。言葉が通じなくても何とかなつたのだから、「どこへ行つてもコミュニケーションが取れる日本で出来ないことはない」という感覚になつっていた。

もちろんビジネスの世界はそんなに甘いものではなく、苦労と挫折は絶えなかつたが、シンガポールでの経験が支えになり乗り越えられたと思う。

そして今41歳。これからも挑戦を続けてい



シンガポールではフットサルも（後列右から3人目が筆者）

くつもりだが、10年前の私のように将来に漠然とした不安を抱えている人はいないだろうか？在京飯田高校同窓会誌に寄稿する機会をいただけたのも何かの縁。今度は私が誰かの背中を押す役割を出来ればと思う。